

21の講義内容 注釈書類の引用文献 ―その2 和歌資料―

和歌の資料を見るに、凡てが仮名書きにされた資料を見慣れていると、最初から仮名書きで標記されていたように誤解に陥るのが常のことである。そこで、『万葉集』は、万葉仮名で表記されていることは誰もが知る常識であるが、この万葉仮名による表記法は、日本語の和歌表現のなかでどのよう位置づけられ、どの程度その資料を見ることが可能なかを含めここではその検討課題としてみることにする。

平安時代後期の佛經説話集である『今昔物語集』巻第十二・多武峯増賀聖人語に、

亦、往生極樂□寄^マ、和歌^ヲ令讀^ム。聖人^モ自^ラ、和歌^ヲ讀^テ云^ク、

美豆波左須夜會知阿末利乃於比乃奈美、久良介乃保祢尔阿布會宇礼志岐

と。〔大系三183⑮〕



※画像資料 <http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/konjaku2/frame2/kj12/kj12f46.html>

のように、多武峯増賀聖人が漢式和歌を詠んでいたことが茲に伺えるのである。（受講学生杉山君の指摘）、この歌について大系の編者は、『続本朝往生傳』にも、「水輪指」・「支離」（名義抄・字類抄でも確認する）と書き、老齡の形容語表現で、閑節がガクガクし、よろめきがちなさまをいう」とし、歌の大意を「八十余の老年に及び、やっと会いがたい幸いに会うことができるとは、何たるうれしいことか」と記載する。

次に、室町時代の古辞書『下學集』には、和歌が二首引用されていて、此の辞書が標記語及び割り注書きにするところを、漢字表記による注釈を施しており、ここにも和歌が引用されているが、凡て漢字書き、すなわち「万葉仮名」式で表現されている。これについては、拙論『編者「東麓破納」は中国禪僧と推論す」―室町時代の古辞書『下學集』注釈文を中心に―』（近思学報・史料と研究第二輯、港の人、二〇〇五年刊）の三で少しく述べておいた。次にその箇所を示す。

三 「真名書きの倭歌」 収載の意識 推論その三

(51) 手向^{タムケ} 神供也 又山ノ坂^ヲ曰^フニ手向^ト也 亦起^ル於^ニ神供^ノ 其^ノ義^ニ云^ク旅中之山路^ニ無^シ熟^シ食^ハ之^ヲ神^ノ供^ト 或^ハ手^ヲ折^リ草木^ノ枝^ヲ葉^ヲ以^テ備^フニ神供^ト 故^ニ呼^ビ山路^ノ坂^ヲニ云^フニ手向^ト 有^リ倭歌^ト 云^ク此^ノ旅^ハ幣^ヲ取^リ不^レ取^ル 敢^テ手^ヲ向^テ山^ノ紅^ノ葉^ヲ 錦^ノ神^ノ隨^ニ意^ニ云^ク〔神祇35⑥〕

※「倭歌」という用語は、広本『節用集』も使用する。茲に引用した歌は、『古今和歌集』羈旅・420の菅原道真の作で、これを『新撰万葉集』風に「此^コ旅^ノ幣^ヲ取^リ不^レ取^ル 敢^テ手^ヲ向^テ山^ノ紅^ノ葉^ヲ 錦^ノ神^ノ隨^ニ意^ニ」と十五漢字による真名表記体になっているわけである。いわば、「真名本古今和歌集」体とでもいう当代の「倭歌」の取り組み方法が如実に伺われる。この歌と同様に真名書きの倭歌として、次の標記語「鶯宿梅」にも見えている。そ

して、諸本は勿論のこと広本『節用集』もこの内容を継承する。

(272) **鶯宿梅** アウシユクバイ 本朝^{コトバイン}之後鳥羽院^{コトバイン}時京洛^{クワフ}有^リ二寡婦^{ソノウエ}一 園^{ソノウエ}植^チニ一株^{チク}ノ之梅^ノヲ一 紅白相^{マシハツ}交^テ 其^{コト}花尤^モ異^{ナリ}
毎^ニ春^{ハル}有^リ鶯^{ウケイ} 来^リ宿^ス 可^シ謂^ツ鶯^{ウケイ}花相^ヒ得^ヒ一^ニ矣^エ 院^イ聞^キレ^ラ之^ヲ欲^スレ^テ移^{ント} 内^{ナイ}園^{エン}ニ 婦^メ作^テ二^ニ倭歌^{ワカ}一^ヲ云^フ
勅^{チヨク}ナレバ^{イト}最^{カシコシウグヒス}賢^{ヤト} 鶯^{ウケイ}宿^ト問^ト如何^{イカニ}答^{コタ} 院^イ感^カ而^ス不^レ移^ス也^ナ 盖^{ケダシ}因^テ二^ニ婦^メノ歌^{ウタ}一^ヲ名^ナ曰^フ二^ニ鶯^{ウケイ}宿^ト梅^ト一^ヲ 古^コ老^ロノ曰^フ
婦^メ家^ケ旧^{キウ}園^{エン}京^{キョウ}洛^{ラク}二^ニ条^{ジョウ}林^{リン}光^{コウ}院^{エン}是^シ也^{ナリ} 〔草木^{ソクボク}131②〕

※この説話譚だが、『大鏡』第六卷一七〇・鶯宿梅には、いとをかしうあはれに侍りしことは、この天^{テン}曆^{リキ}の御^ミ時^{トキ}に、清涼殿^{セイリョウテン}の御前^{オノマヘ}の梅^{ウメ}の木^キの枯^カれたりしかば、求めさせたまひしに、なにがしぬしの藏人^{クラウジン}にいますがりし時、うけたまはりて、「若^ニき者^{モノ}どもはえ見^ミ知らじ。きむぢ求^{モト}めよ」とのたま いしかば、「一^{ヒト}京^{キョウ}まかり歩^アりしかども、侍^シらざりしに、西^ニ京^{キョウ}のそ^ソこなる家^ケに、色^{いろ}濃^濃く咲^ひきたる木^キの、うつくしきが侍^シりしを、掘^ほりとりしかば、家^イあるじの、「木^キにこれ結^ゆひつけて持^もてまゐれ」といはせたまひしかば、あるやうこそはとて、持^もてまゐりてさぶらひしを、「なにぞ」とて御^ご覽^{らん}じければ、女^メの手^テにて書^かきて侍^シりける。

勅^{ちよく}なればいと何かしこしうぐいすの宿^{しゆく}はと問^とはばいかか答^{こた}へむ
とありけるに、あやししく思^{おぼ}し召^めして、「何^{なに}者^{もの}の家^イぞ」とたづねさせたまひければ、貫^{つらゆき}之^ノぬしの御^み女^{むすめ}の住^すむ所^{ところ}なりけり。「遺^ゐ恨^{こん} わざをもしたりけるかな」とて、あまえおはしましける。繁^{しげ}樹^き今^{いま} 生^{なま}の辱^{ぞく}号^{ごう}は、これや侍^シりける。

けむ。さるは、「思^{おも}ふやうなる木^キ 持^もてまゐりたり」とて、衣^{きぬ}かづけられたりしも、辛^{から}くなりいき」とて、こまやかに笑^{わら}ふ。
とあつて、村上天皇^{ムラノミカド}の天^{テン}曆^{リキ}年^{ネン}間^{カン}(九四七-九五六)に御^ミ所^{ところ}清涼殿^{セイリョウテン}の梅^{ウメ}が枯^かれてしまったので、代^かわりの梅^{ウメ}を探^たして、西^ニの京^{キョウ}にあつた紀貫^{キクワン}之^ノ女^メ(紀内侍^{キノウヂ})の庭^ニの梅^{ウメ}の花^{ハナ}が美^うしかつたので、勅^{ちよく}命^{めい}により御^ミ所^{ところ}に移^{うつ}植^うえられることとなる。女^メは別^{わか}れを惜^{おぼ}しみ、

勅^{ちよく}なれば いともかしこし 鶯^{ウケイ}の 宿^{しゆく}はととはば いかかこたえむ
としたため、梅^{ウメ}の枝^エにこの歌^{ウタ}を掛^かけて送^{おく}り出した。この歌^{ウタ}が村上天皇^{ムラノミカド}の目^めにとまり、娘^{むすめ}を憐^{あは}んで元^{もと}の庭^{にわ}に返^{かへ}されたという筋^{すべ}書きであり、『拾遺集』雑下^{ザツゲ}にも見え、後世^{ゴセ}「鶯宿梅^{ウケイシュクバイ}」または「軒^の紅梅^{ベニウメ}」と称^{なづ}せられるようになったというものである。この歌^{ウタ}が室町時代^{ムロマチ}の古辞書^{コジショ}『下學集』にて、標記語^{ヒョウキゴ}「鶯宿梅^{ウケイシュクバイ}」として扱^あわれているものの、その時代^{エダ}を後鳥羽院^{ゴトバイン}の時代^{エダ}に再設定^{サエ}され、紀貫^{キクワン}之^ノ女^メもただの「寡婦^{ソノウエ}」に置き換^かえられている。そして、この歌^{ウタ}自体^ミも「勅^{チヨク}ナレバ^{イト}最^{カシコシウグヒス}賢^{ヤト} 鶯^{ウケイ}宿^ト問^ト如何^{イカニ}答^{コタ}」と九漢字^{クウカンジ}を用^{もち}いた真名体^{マナミタマ}に仕立^{しだて}て直^{ただ}している。
このように真名体^{マナミタマ}にして語注^{ゴシュ}記^キに収載^{しゆざい}した辞書^{ジショ}編纂者^{ヘンサンシャ}である東麓^{トウロク}破納^{ハナク}が「倭歌^{ワカ}」という韻文^{インモン}に対しての収載^{しゆざい}表記^{ヒョウキ}方法^{ホウホウ}にも大陸^{ダイリク}の漢学^{カンガク}風^{フウ}真名体^{マナミタマ}を以^もて記載^{しやくざい}しようとする強い意識^{イシキ}が伺^{うかが}い知^しられるのである。

漢字書きの和歌 その2

このように、室町時代の禪僧^{ぜんそう}たちが「和歌資料^{わかざり}」を如何^{いかに}に読^よむかと言^いえば、漢式^{カンシキ}和文^{ワモン}で読^よむというのが習^なわしであったようだ。次に挙^あげるところの『塵荊鈔^{ちんけいせう}』は、国立国会^{こくりつこくかい}図書館^{としよかん}蔵^{ざん}、十一卷^{じゅういち}十一冊^{じゅういち}〔函架番号^{くわんがばんごう} WAI6-128〕の写本^{しゃほん}で、天下^{てんか}の孤本^{こほん}で、製作^{せいさく}年代^{ねんたい}は明^{めい}確^{かく}ではないが、「文明^{ぶんめい}十四年^{じゅうしよねん}（一四八二）

壬寅」の成立と見ている資料である。この資料にも「和歌」が引用されているので、紹介しておくとして、『塵荊鈔』卷之十に、

廿二三日ニ至而、半明ニシテ又弓ノ弦ノ如シ。故下絃ト云。卅日ニ至而日月相合ス。月八日ノ為ニ消シ尽ス。是ヲ晦ト云。此上下弦之故ニ弓張月ト云。

志岐嶋哉高円山之木間与利〔光〕指添弓張月

この歌は、『新古今和歌集』巻第四秋哥上・383堀河院御哥で、詞書きに「雲間微月といふ事を」とし、

しきしまやたかまと山のくもまより光さしそふゆみはりの月

という歌を漢式和文化化したものである。『八雲御抄』巻第三〔枝葉部〕、天象部「月」の項に「ゆみはりの月（非三日月）。半月也。是故人説なり」という。さらに、九首の和歌が引用されているので、それぞれの和歌集からの引用かを確かめてみよう。

久方乃中生里奈礼伴光於乃躬曾憑辺良奈留

久方八月也、里ハ桂ノ里也。

この歌は、『古今和歌集』巻十・に、

これさだのみこの家の哥合によめる たゝみね

968 久方の 中におひたる 里なれば 光をのみぞ たのむべらなる

とあって、歌句もすべて合致する漢式の和歌である。

夕月夜於保津加奈志那玉櫛箭二見乃浦和阿計天古曾見免

玉櫛ハ三日月、又夜也。

この歌は、『古今和歌集』巻九・相聞 [ふぢはらのかねすけ](#)

417 タづくよ おぼつかなきを たまくしげ ふたみの浦は あけてこそ見ぬ

とあって、「おぼつかなきを」の箇所を「於保津加奈志那」、「ふたみの浦は」の箇所を「二見乃浦和」と元の歌を換えて記載する。とりわけ「浦和」の表記に、係助詞「は」を「和」と読み音で表記していることが注目されるところである。下の歌句には、「二見の浦」から「蓋―見―裏」とし、その蓋から「玉くしげ」を、さらにそこから「開ける―（夜が）明ける」と続けて、それを暗くて乾飯が食べずらいことに懸けた技巧表現の歌となっている。

曉爾夜和成爾計利玉櫛箭片岡山爾月傾奴

大舟爾摩於知志良奴幾海原爾漕出而渡月人男

月人男八月也。

この歌は、『万葉集』巻十五〔七夕歌一首〕

3611 於保夫祢尔 麻可治之自奴伎 宇奈波良乎 許藝弓天和多流 月人乎登祐

大船に 真楫しじ貫き 海原を 榜ぎ出で渡る 月人壮士

右、柿本朝臣人麿の歌。

とあって、本来の万葉仮名表記とは異なる漢字書きで歌を表現している。ここで、室町時代の歌ことばで気づくことだが、元の歌を正確に伝えていないことがあり、ここでも「麻可治【真楫】」を「摩於知」、「之自奴伎」を「志良奴幾」、「宇奈波良乎」を「海原爾」と記載しているのである。

月読乃光爾任足引乃山於辺多天天登於宇良奈具爾
月読八月也。

この歌は、『万葉集』巻四 相聞、

湯原王歌一首

670 月讀之 光二來益 足疾乃 山乎隔而 不遠國

月讀の 光りに来ませ あしひきの 山を隔て、 遠からなくに
とあって、二句の「光二來益」を「光爾任」とし、終句「不遠國」を「登於宇良奈具爾」と置き換えている。

露乃命草乃葉爾古曾加々礼留於月鼠乃 噪哉

月鼠、樓炭経之説也。

朝彦乃今朝和宇良々爾左志津覽軒垂氷乃々玉水

朝彦八日也。星宿之事、七曜トハ密日太陽星也、本地觀音。……凡ソ大星ハ七百里、中星ハ五百里、下星ハ三百廿里ト云ヘリ。

この歌は、曾禰好忠の『好忠集』、そして『続詞花集』に

峰に日や今朝はうららにさしつらむ軒の垂氷の下の玉水

とあり、後に堀河院が、『堀河院百首』に、

朝日子や今朝はうららにさしつらん田面(たのも)の鶴(たづ)の空に群れ鳴く

と詠んだ歌を合作した内容である。上句「朝日子や」を「朝彦乃」とし、「今朝はうららに」の係助詞「は」を発音表記の「和」で表し、尾句「下の玉水」を「々玉水」と記載する。二つの和歌を合併させた珍しい歌である。

天乃海雲乃波立月乃舩星乃林爾漕加惠佐礼奴
海波林、皆似物也。

この歌も『万葉集』巻七・雜詞、詠天、

1068 天海丹 雲之波立 月舩 星之林丹 榜隠所見

天の海に 雲の波立ち 月の舩 星の林に 漕ぎ隠る見ゆ

右一首柿本朝臣人麿之歌集出の作歌

とあって、「天海丹」の字余りを「天乃海」とし、尾句の「榜隠所見」を「漕加惠佐礼奴」と置き換えている歌である。

榊葉爾天降代乃神遊陰奴月爾星歌也

成賢作

とあるのがそれで、ここに「成賢」という学僧が和歌を漢式和文にして記載したものを収録している。